

瑜伽行唯識学派における二諦説解釈の変遷

早 島 慧

二諦説は中観派の中心思想として知られ、一方瑜伽行唯識学派の中心思想としては三性説を挙げることができる。しかしながら、瑜伽行唯識学派の思想体系においても二諦説は重要な思想であり、初期中観派の二諦説とは異なる独自の二諦説解釈が確認される。本発表では、従来あまり注目されることのなかった、瑜伽行唯識学派の二諦説解釈について、変遷という観点から考察した。

先行研究において、中観派とは異なる瑜伽行唯識学派独自の二諦説解釈の特徴として、「仮説の所依」を認める点が指摘されている。つまり、世俗という言葉表現がなされる際に、その仮説の原因たる所依を認める二諦説である。金才権氏は、「仮説の所依を『依他起性』と位置付けたことから、瑜伽行派の独自の思想である『三性説』が形成されたと推測される」と述べ（『「中辺分別論」における三性説の研究』、龍谷大学博士論文、2008年、pp. 67-68, fn. 67.），瑜伽行唯識学派の中心思想である三性説形成の一要因として、瑜伽行唯識学派独自の二諦説、仮説の所依を認める二諦説を指摘する。

しかしながら、瑜伽行唯識学派独自の二諦説解釈として別の解釈が指摘できる。三性説成立以降の瑜伽行唯識学派の文献においては、三性説に基づき二諦説を解釈する用例が確認される。特に『中辺分別論』第三章「真実品」は、根本真実たる三性説に基づき二諦説を説明し、世俗・勝義をそれぞれ三種に分類する。このうち、勝義は円成実性のみによって示され、真如、涅槃、道の三種であるとされる。真如、涅槃のみならず、勝義を目的とする道もまた勝義であるという解釈は非常に特殊なものであり、これは安慧の注釈によ

って、円成実性解釈に起因するものであるとされる。このような二諦説解釈は、初期中観派の文献には確認されない瑜伽行唯識学派独自の解釈と考えられる。

従って、本発表では、瑜伽行唯識学派の二諦説解釈が

三性説形成と関連する二諦説→三性説成立→三性説に基づき解釈される
二諦説

というように変遷すると考えられることを指摘した。

(龍谷大学大学院博士後期課程三回生)